ハシリボシ

滝沢美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハシリボシ

【Ｎコード】

Ｎ６０７０Ｐ

【作者名】

滝沢美月

【あらすじ】

初対面でかわいいと言われ続けた俺に、初めて「かわいい」と言わなかったその子。興味を惹かれて見つめてると、その子は眉間のしわを深くして俺を見た。その顔にイライラし始め・・・　『クリスマスなんて大嫌い！』の香川理桜ｓｉｄｅｓｔｏｒｙ

【前半戦】　うらはらな恋心

俺はその日もうんざりしていた。

四月、小学校からの友達やサッカークラブで顔を合わせたことのあるやつ数人と、入学式を目前に教室で話していた。

教室を見渡すと、半分以上が違う小学校だった生徒で、俺より背の小さい男もいるし、背の高い男もたくさんいた。その中で、いくつかのグループに分かれて話す女子が、こそこそとこっちを見てるのに気づく。

「ねねっ、あの子、すっごいかわいくない」

「あっ、私知ってるよ。西海神小の香川君だよ。女の子よりきれいな顔してるよね」

その会話に、俺はぴくっと反応する。女子たちはこそこそ話してるつもりだろうが、俺にはその会話がまる聞こえだった。

確かに、俺はそこらへんの女子よりも整った顔をしてる。初対面のやつは、だいたい俺を見るなりかわいいというのだ。だが、男がかわいいとか言われても嬉しくないんだよ！

他の女子のグループも同じようなことを話してるのが聞こえて、俺はイライラする気持ちをどうにか抑えようとして女子の方をじろっと見た。するとその中に、眉間にすごいしわを寄せてこっちを見ている子がいるのに気づく。

「うーん、確かに綺麗な顔だね。でもあと二、三年したら、すっごくかっこよくなるんじゃない？　将来有望そう」

その子がそう言った。
かわいいとかきれいとはしょっちゅう言われるが、かっこよくなるなんて言われたのは初めてで驚いた。その瞬間、心臓の音がドキドキと早くなる。
その子は違う小学校出身で、自己紹介の時に千葉花音（ちばかのん）という名前だと知る。出席番号が割と近くて、その子の席は俺の斜め前。気がつくと俺は、いつもその子を見つめていたのだ。
でも好きとかそういうのではなく、俺の事を初対面でかわいいと言わなかった初めての子が、どんな子なのか興味を持ったからにすぎなかった。実際、千葉花音は、顔は特別かわいいわけでもなく平凡、人見知りなのか仲のいい友達意外と話しているところをほとんど見かけず、クラスでは影の薄い存在だった。ただ、時々する眉間にぎゅっと皺を寄せた顔を見ると、なぜかイライラと胸がざわついた。

中学生になって二カ月が経った頃、二年生の女子に呼び出されて告白された。
その先輩とはいままで話したこともなかったが、初めての告白にうかれ、付き合うことにも興味があったから、あまり深く考えずに付き合いだした。
先輩とは一緒に帰ったりしたけど、付き合うことに対して抱いた期待以上のことは起らなかったし、いい人だとは思うが女の子として好きかと言われると微妙なとこだった。
それからしばらくして席替えがあって、千葉花音と席が隣になる。仲良くなるチャンスだと思った。しかし、千葉花音がこっちを見ることも話しかけてくることもなかった。おまけに、今まで観察す

ることが楽しみだったのに、席が隣ではジロジロと見ることもできず、イライラした日々を過ごす。
　ある日、社会科の教科書を忘れたことに授業が始まる直前に気づく。もっと早く気づいていれば他のクラスに借りに行けたけど、しかたなく隣のやつに教科書を見せてもらおうと思った。俺の隣、というと……左側は窓で、右側は彼女だ。俺は思い切って声をかけた。

「なぁ、教科書見せてくれる？」

　しかし、彼女は全く反応を見せずなにか一生懸命ノートに書いていた。聞こえなかったのかと思い、もう一度声をかけるがこっちを見ようともしない。
　そのうち、先生が来て授業が始まった。俺は無視されてるのかと思ってなんだか腹が立ち、ダンッと勢いよく俺の机を彼女の机にくっつけると、彼女の机の上にきっちり揃えて置いてあった社会科の教科書をひったくって自分の机の真上で開いた。
　それまで夢中でなにか書いてた彼女が、机をくっつけた拍子にゆれた机に驚き、こっちを振り仰いで一瞬動きが止まり、俺の顔を見て、きゅっと眉間にしわを寄せた。
　俺に向けられたその表情に、視線に――ドキンっとする。それと同時に鼓動が激しく打ちはじめ、わずかに顔が赤くなるのを感じて視線をそらした。
　しばらくして、腕の下敷きになった教科書を引っ張られてることに気がつく。ちらっと横を見ると、彼女が赤い顔をして必死に教科書の端を引っ張っていた。その顔があまりにかわいくて、俺はその顔をもっと見たいと思って、教科書に乗せた腕に力を入れその一時間、彼女の教科書を独占して、ちらちらと彼女を観察した。
　初めは、教科書を取り戻そうとしてたが無理だとあきらめたのか、前を見て先生の話を聞き、ノートを必死に取っていた。俺は、初めてこんなに近くにいる彼女の存在を全身で感じて、体の右側だけが

熱を持ったように熱かった。
　授業が終わる頃、俺はウトウトと寝てしまっていて、ドンっという机の揺れで目を覚ます。
顔を上げると、彼女がぎゅっと眉根を寄せた顔で叫んでいた。

「勝手に、私の教科書使わないで！　返して！」

　そう言った彼女に思いっきり教科書を引っ張られ、俺は教科書に乗せた腕のバランスを崩し、顎をしたたかに机にぶつける。顎をさすりながら再び顔を上げると、彼女は教室から駆けだしていくところだった。
　突然の大声に、クラスメイトは俺と教室の入り口をちらちら交互に見ている。
　俺は一人にやける顔を隠すように手で口もとを押さえ、好奇心から少しはみ出して生まれた自分の気持ちに気づいてしまった。
　と言っても、すぐに自分の気持ちを伝えることはできなかった。
なぜならば、初めての恋だったからだ。それに俺には彼女もいる。
どうしたものかと悩む――

※

　放課後、部活に向かったが、忘れものに気が付き教室に戻ると、数人の女子が話していた。その中に彼女がいて、俺はあわてて扉に隠れる。

「花音ちゃんいいなぁ、香川君の隣の席で」

「ねぇ～、香川君てかわいいし、やさしいし、隣の席だったら仲良

くなって付き合っちゃったりして〜」

そんなことを話していた。きゃっきゃっと楽しそうな声の中、彼女は一人うかない声で。

「あんなやつのどこがいいの？」

彼女がつぶやいた。

「あー、花音ちゃん、この間すごい怒ってたもんね？　何があったの？」

「私の教科書を勝手に使って、そのくせ授業中に居眠りしてるんだよ？　信じられないでしょ！？」

怒った声と一緒にバンバンっと音が聞こえる。きっと、怒りにまかせてまた机を叩いているのだろうと想像して、頬が緩む。

「えー、居眠りしちゃうなんてかわいいじゃん」

「そーだよ、席くっつけてなんか話さなかったの？」

そう他の女子が言って笑う。

「全然！　だって、教科書一人占めされてノート取るのに必死だったんだから！」

「あらら、それは大変だったね？」

「でもさ、あんなかわいい香川君が隣にいたら、好きになっちゃう

んじゃない？」
その言葉にドキンとして、俺は胸に淡い期待を抱き――次に発せられる彼女の言葉に耳をすませた。
「まさか！　ありえないし！　あんな強引なやつ、大嫌い！」
しかし、当たり前と言うべきか、あんな意地悪をしたのだから、好かれているわけはないか。
ガクッと肩を落としてうなだれる。期待した自分が馬鹿らしかった。
「まあまあ……」
彼女はまだ何か愚痴っているようで、友達がなぐさめていた。
俺はその場を静かに立ち去る。しばらく廊下を歩いて、はぁーっと落胆のため息をはいた。

自分で言うのもなんだが、俺は女子にモテる。中学に入ってからもう何度告白されたことか。まあそのほとんどがその時初めて話す子ばかりで、見た目だけで告白されてるように感じるが、この顔のせいかおかげか、普段、女子の方から積極的に話しかけられる。
下に弟と妹がそれぞれ二人ずついるから面倒見はいいし、頼られるのは好きだ。女子から頼みごとをされれば快く引き受けるし、女子には優しく接してる方だと思う。
ただ、自分から積極的に女子になにかしたことはない。
千葉花音と仲良くなりたい、どうにか彼女の中の俺の悪いイメージを撤回したい、とは思うものの、どうすればいいのか全く分からなかった。

なんとか彼女と話そうとペンやノートを借りるのだが、彼女を目の前にするとぶっきらぼうな口調や態度になり、そのたびに彼女の俺を見る目がどんどん冷たくなっていった。

俺が声をかければ、かならず眉間にぎゅっと皺をよせ嫌そうな顔をする。仲良くしたい、優しくしたいと思うのにその顔を見ると、心とは反対に、ひどい態度をとってしまうのだった。

※

夏、部活が忙しくなるのと反比例して、彼女の先輩と遊びに行く時間がどんどん減った。

夏の終わり、『他に好きな人が出来たから』というメールが、初めてできた彼女との別れを告げた。自分の気持ちを自覚した今、去っていく彼女を引きとめることもしない。

二学期になり、席替えが行われ千葉花音とは席が離れ、近くに彼女の気配を感じることも、彼女を盗み見ることもできなくなってしまった。隣の席、というたった一つの接点がなくなり喪失感に襲わせる。たとえ冷たい視線でも、向けられないよりはましだとさえ思う。

その寂しさを埋めるように、クラスの女子に告白されてそのまま付き合いだした。それなりにその子のいいとこを見つけ、やさしくし接して楽しく付き合ったつもりだが、俺の心がどこか上の空で違うとこを向いてると気付き、やはりそのことが気に食わないようで、付き合いは長く続かなかった。

それでも、俺が彼女と別れたと聞くと告白してくる女子は後を絶えず、すぐに新しい彼女ができる。基本、来るものは拒まず去る者は追わず。そんなことを繰り返して、千葉花音に対するやりきれない思いをどうにかしようとしてた。

【前半戦】　うらはらな恋心（後書き）

香川、中学生編です。

【ハーフタイム】　その日、別たれた運命

二年のクリスマスイブ。前の彼女と別れてから数週間。
一年の時同じクラスで、今は隣のクラスになった女子に映画に誘われてプランタンに行った。その子がどういうつもりで映画に誘ったのかは薄々気づいていた。映画を観終わってからクリスマスツリーを見に噴水広場に向かうと、その子が立ち止まり俺の手をぎゅっと握って告白してきた。

千葉花音とは今年も同じクラスだったが、一年の時以来席が隣になることはなく、まともに話せていない。
彼女がいる間は彼女の事を考えていられるが、前の彼女と別れたこの数週間は、千葉花音の事が気になってしょうがなかった。気になりだすとイライラして、千葉花音に話しかけずにはいられなくなった。
俺が声をかけると、あの眉間にしわを寄せた顔をして振り返る。その顔を見ると、また無性に苛立って、優しくしたいと思うのに荒い口調になる。千葉花音はそんな俺に何か言いかけて……きゅっと眉間のしわを深くして歯を食いしばって顔をそむける。
その顔を見て、日増しにどうしようもない苛立ちが胸にくすぶっていた。
だから、彼女の告白に手を握り返して答えた。

※

次の日の終業式。教室で、千葉花音が数人の女子に囲まれていた。
ちらっとそちらを盗み見ると、彼女が腕いっぱいにプレゼントを抱えて満面の笑みで友達に笑いかけていた。
ドキンッ。
胸が早鐘をうつ。初めて見た彼女の笑顔に、胸が締め付けられて、その顔から視線がそらせなかった。
なんだ、あんないい顔ができるんだな……、俺が話しかけるときは、いつも眉間にしわを寄せてるくせに。
そう考えて、千葉花音に対して抱いていたイライラの正体に気づく。
千葉花音と初めて出会った時に見た、眉間にしわを寄せた顔。その顔に惹かれて、彼女の笑った顔を見たいと思ったこと。
友達に向けた笑顔を見て、その笑みを自分に向けてほしいと思った。
俺は今まで、何をしてたのだろうか……
どうして、もっと早く自分の気持ちに気がついて、もっと素直になれなかったのだろうか、そう後悔する。
でも、その後悔と同時に、思い知る。
どうやっても、彼女が自分にその笑顔を向けてくれることがないことを。自分の失恋に気づく。

※

中学二年の冬に付き合い始めた彼女とは、俺の中では一番長い付き合いになる。約一年間付き合い、受験を目前にお互い勉強に専念するために別れる。
それまでに付き合ってきた彼女よりも、いろいろなことを話し、

とても大切にしてきたと思う。だから、俺の心の奥に閉じ込めた気持ちに気づいた時も、あえてなにも聞いてくることはなかった。
もし、彼女と別れずにそのまま付き合っていたら、俺の高校生活はもう少し華やかなものになったかもしれない。

俺は、サッカーの強豪校である高校へ進学し、ひたすらサッカーに専念する日々を送る。
相変わらず、告白してくる女子は後を絶たなかったが、いまはサッカーのことで手一杯で付き合うとか考えられなかった。そのうち、告白してくる女子もすっかりいなくなった。
高校二年になり、サッカーに専念することで、中学の初恋をすっかり忘れ始めていた。
その頃から、サッカー部のマネージャーで一年の時クラスメイトだった奈良という女子が、遊びに行こうと声をよくかけてくるようになる。彼女がどういうつもりで声をかけてくるのか薄々気が付いていたが、出かける時はいつもサッカー部のメンバーと一緒で二人きりでということはなく、気持ちを伝えてくる様子もなかった。
もし次に誰かと付き合うのなら、心の底から本気で想い合える相手とがいいと、なんとなく考えていた。その相手として、奈良は近い位置にいたのかもしれない。一人の人物を除いて。
再会することもなければ、忘れ去るつもりだった彼女を除いては
――

【ハーフタイム】　その日、別たれた運命（後書き）

中学二年のクリスマス――この日が、香川と花音の運命の分かれ道になってしまいました。

【後半戦　1】　偶然真理

　十二月になってすぐ、クラスメイトの山口にクリスマス前の日曜にある合コンに誘われる。気は進まなかったが、ちょうど部活も休みの日だったし、たまにはいいかと行くことにした。
　その日、部活が早く終わり一人駅前のＣＤショップにいた。店内は有名なものから新しいものまでいろんなクリスマスソングが流れていて、クリスマスが近いことを実感する。
　久しぶりにきたＣＤショップで、欲しかった新曲を視聴していると、ぽんっと肩を叩かれて振り向くと、ストレートの黒髪が視線に入って、一瞬ドキンっとする。胸の奥底に閉じ込めてた感情がじわじわと、すきまからにじみ出す。
　目を見張った俺は、顔を見てそれが奈良だと気づきほっと溜息をはく。

「おう」

　ヘッドフォンを外して、片手をあげる。

「理桜（りお）、偶然」

　そう言って奈良が笑う。奈良は、部活中はいつも結んでいるストレートの黒髪をさらっと後ろにながしていた。

「めずらしいな……」

　そう呟いた俺に、首をかしげる奈良。

「いつも結んでるから、一瞬、誰か分からなかった」

その言葉に頬が赤くなった奈良はうつむいた。

俺は、奈良と間違えた彼女を二年ぶりに思い出し苦笑いする。

「理桜、あのね、私……とつきあって」

少し昔のことを思い出していた俺は、適当に相づちを打った。

「ああ……」

「ほんと？　あのっ、じゃあ今週の日曜日って部活休みでしょ？　その日会えるかな？」

頬を染めてる奈良を見て、彼女がどんな意味で「つきあって」と言ったのかに思い至り、適当に相づちを打ったことを後悔する。だから、あえて聞き直さずに、買い物に「つきあって」と誤解したふうを装う。

「悪い、その日は先約があって。どこか行きたいの？」

「えっと、プランタンに……、じゃあ２３日は？」

奈良は俺の返事に少しがっかりした顔をして、ぱっと顔をあげて笑って聞いた。

「ああ、大丈夫だと思う」

※

十二月十九日、日曜日。合コンの日。

高校の近くにあるショッピングモール・プランタンに、クラスメイトの山口と石川と向かう。相手は、山口の中学の同級生とその友達と言っていた。

プランタンのメインゲートで待っていると、背の高い子と背の小さい子がこっちに向かって手を振りながらやってきた。

「山口！　ひさしぶり」

たぶんこの子が山口の同級生の宮城さんだなと見る。茶色に染めた髪とミニスカートを履いていかにもといったカンジ。

背の高い子は、俺と同じくらいの身長で、ポニーテールで縛った髪が元気な印象を与えるが、目と鼻筋が通ってきりっとした美人だった。

その二人の後ろに隠れるようにして、宮城さんに手を握られている子がいることに気づく。顔は見えず、肩の上で切りそろえられた黒髪が揺れている。身長は宮城さんと同じくらいだろうか。パンツスタイルは長身美人の子と同じだが、チュニックを合わせて女の子らしい恰好をしていた。

そんな風に三人を観察してると、宮城さんが山口を友達に紹介しだした。

「彼が、私の友達の山口　健君」

「山口です、こっちにいるのが、石川と香川」

それに続いて山口が挨拶し、石川と俺を順番に紹介した。俺は軽

く頭を下げる。
するとそれまで宮城さんの後ろに隠れてた子が顔を出し、俺の顔を見て動きが止まった。
その瞬間、俺は目を見張る。中学の時は腰まであった長い黒髪が今は短くなっていて、まさか彼女とは思わなかったから……。

「……千葉花音？」

俺は彼女を指さして聞いた。俺の声に、彼女はぎゅっと眉間のしわを深くする。

「香川理桜……どうしてあなたがいるの？」

そう言った彼女の顔を見て、俺は、目の前にいる彼女が確かに千葉花音だと確信して、久しぶりに見る顔に、数日前から俺の胸の底でゆらゆらとくすぶってた気持ちが、ついにあふれだした。

カラオケ屋に着くと、女子三人組はトイレと言って席を立った。女子がいなくなったカラオケルームで。

「香川、中学の同級生と偶然の再会だなんてすごいな？」

そう言ってこっちをにやにや見る石川を、俺は無視した。
千葉花音と合コン、なんて似合わないんだ。きっと、宮城さんに無理やり引っ張られて来たとかそういうことか？
石川の言葉を真に受けるわけではないが、偶然の再会に少しうかれていた。この機会に、千葉花音と少しは親密になれるかもしれない……そんな淡い期待をもつ。

「千葉花音ちゃんって言ったたっけ？　香川の中学の同級生。かわいい子だな」

その山口の言葉に、ぴくっと耳が反応する。
二年ぶりに会った彼女は、確かにかわいくなっていた。中学の時長かった髪もとても綺麗だったが、ボブヘアがとても似合っていて、一段とかわいく見えた。

女子たちが戻ってきて、自己紹介を始めた。

「では、改めて自己紹介します！　宮城　順子です」

「長野　悠です」

「……千葉　花音です」

彼女は小さな声でそう言うと頬を染めて俯いた。俺は、相変わらず人見知りなのかと中学時代のことを思い出していたが、その純情な雰囲気が山口と石川の胸にぐっときたのだろう。

「花音ちゃんって名前かわいいね」

「香川と同級生だったたってほんと？」

山口と石川に交互に話しかけられて、彼女は震えていた。

「えっと……」

なんとか喋ろうとしている千葉花音を山口と石川がじろじろと見

ている。少し恥じらっておどおどとしている様子はかわいらしい。そんなかわいい千葉花音を、これ以上、他の男に見せたくないと思った。彼女に見入るのが許せなくて、ドカッと机を蹴って、リモコンを取る。

「なんか曲入れていい？」

机を蹴った音に驚いて、一斉にみんなが俺を振り返る。俺はその視線を気にせず、この間ＣＤショップで聞いた新曲を入れて、歌いはじめた。

曲が流れたことで室内が暗くなり、千葉花音への注目もなくなり、みんな次々と曲を入れる。

歌っていた宮城さんは、歌い終わると俺の側に来て。

「香川君、隣に座ってもいいかな？」

そう言って俺の返事も待たずに、隣に座った。

「ねね、香川君てかっこいいね！　もてるでしょ～？」

この数年で身長もそれなりに伸び、かわいいと言われることも少なくなった。合コンで、こう聞かれることは普通だ。

「そんなことないよ」

俺は、にこっと営業スマイルで答える。基本、女子には優しいし、千葉花音の友達ならば尚更適当に返事をするわけにはいかないと思った。

「えー、ホントに？　じゃあさ、彼女はいるの？」

その質問の返答には困る。彼女はいないが、宮城さんがその気で聞いているのは分かる。いないと言って、変に期待を持たれたり、言い寄られるのは困る。そう思って。

「あー、好きな子はいるよ」

そう言うと、宮城さんは明らかに残念そうな顔をして、それからぱっと石川の隣へと移動して行った。

俺はふぅーとため息をはく。

彼女に再会できたこの合コンに来てよかったと思ってたが、色恋沙汰の煩わしい会話をしなければならないのは少し苦痛だった。

ふっと視線を感じて顔をあげると、長身美人の長野さんが俺をじっと見ていた。

俺と目が合うと、くすっと意味深に笑って、横を向いた。

なんだ？

何を笑ったのか分からなくて、首をかしげる。

この合コン……やる気満々が二名、意味深な発言や行動をするのが二名、合コンに興味がないのが二名……変な合コンである。

長野さんが歌いだし、横を見ると、山口が千葉花音の隣に座って楽しそうに話していた。山口がにかっと白い歯を見せて笑うと、彼女が顔を赤くして笑っていた。

その瞬間。

考えるよりも先に体が動いていて、俺は千葉花音の隣まで行くと隣に座っていた宮城さんを押しのけて、どさっと勢いよく椅子に座った。

千葉花音が、びくっと体を震わせてこっちを振り返り、俺を見るなり叫んだ。

「なっ、なに!?」

俺は千葉花音を無視して、テーブルの上のジュースを飲み干す。

「なに？」

もう一度千葉花音が叫んだ。顔を見なくても、眉間にしわを寄せてるだろうと想像がつく。見てもいないその顔にイライラしはじめて、空になったコップを持って、部屋を出た。

ドリンクバーコーナーに着くと、はぁーと大きなため息を一つ。

俺はまた、なにをやってるんだろうか……今度こそ、普通に優しく接しようと心に決めていたのに。

カウンターにコップを置き、腕をついてうなだれた。

千葉花音と普通に話せてる山口にいらつき、笑顔を見せてる彼女にいらつき……いてもたってもいられなかった、二人の仲を、邪魔せずには――

とは言っても、それ以上邪魔をすることもできず。

山口と笑い合っている千葉花音を見ていたくなくて、俺は目をそらした。たとえ偶然の出会いだろうと、俺と千葉花音では相容れることがないのだと思い知らされただけだった。

そうして、千葉花音との二年ぶりの再会は、接点のないまま幻のように終わってしまった。

【後半戦　1】　偶然真理（後書き）

【後半戦】から高校生編です。

【後半戦　2】　秘密を知る者、秘密をうちあける者

　十二月二十三日、マネージャーの奈良と約束してた買い物に付き合い、プランタンに行く。買い物中、奈良の誕生日が先週の日曜だったと聞いて、奈良が可愛いと言って見ていたキーホルダーをプレゼントした。
　昼時になり、ファーストフードに向かう。日曜祝日はレストラン街は大混雑するが、レストラン街から外れたところにあるこのファーストフードは、場所が遠いという理由からか割と空いている穴場だった。
　お店に入り注文をして、席に向かう。空いていると言っても、さすがクリスマス前だけあってここも混み始めていた。
　どこか空いてる席はないかと視線を巡らせた時、窓際の席に座った山口と千葉花音が視線に飛び込んだ。
　なんで、山口と一緒にいるんだ？
　もしかして、付き合い始めたとか……
　まっ、まさかな、ありえないよな。
　そんなことを考えてぼーっと立ってると、山口と目があう。

「山口」

　気がつくと、俺はそう声をかけていた。
　千葉花音が振り返り、目が合う。どきんっ。胸が早鐘を打ちはじめる。

「おう」

山口が片手をあげて返事をしたので、俺は奈良を振り返って視線で促し、窓側の席へと行った。
山口と千葉花音が、俺と奈良を交互に見ていることに気づき、奈良が挨拶する。
「こんにちは、理桜の友達の山口君だよね」
「えっと、君は……」
「A組の奈良　佳世子です」
奈良が名乗って、頭を下げる。それにつられて、千葉花音も会釈する。
「席、空いてないみたいだから、一緒にいいか？」
俺は山口に聞いて、それから奈良を見た。山口君は頷いき、奈良も笑顔で了承する。俺は山口の隣に、奈良は千葉花音の隣に座る。
奈良が愛想のよい笑顔で言う。
「山口君の彼女？」
俺が聞きたくても聞けないことを、奈良がすんなりと聞いて、ドキンっとする。
そう聞かれて、山口が爽やかな笑顔で千葉花音を紹介する。
「友達の千葉花音ちゃん、今日は映画見てきたんだ」
その言葉に俺は安堵する。なんだ、付き合いだしたわけじゃないんだな。

俺がそんなことを考えてる間、隣で三人はなにやら楽しそうに話していた。俺が会話に加わると、おそらく千葉花音とまた言い争いになるだろう……それだけは避けようと、あえて会話には加わらず窓から外を眺めていた。

「あっ、ちょっとお手洗いに行って来るね」

そう言って奈良が席を立つと、山口が小声で言った。

「なんだよ、彼女の誕生日だったなら先に言ってくれればよかったのに。ってか、いつの間に付き合いだしたんだよ？」

そう言う山口。

いやいや、付き合ってないし。そう心の中でだけ否定する。

「別に」

俺がそれだけ言うと、山口が苦笑した。

「あいかわらず、淡白だな……」

そう言って会話が途切れたと思ったら、千葉花音に向き直る。

「あっ、花音ちゃんは誕生日いつなの？」

「えっ？」

山口にそう聞かれて、千葉花音は目を見開いて驚いていた。

「えっと……」

千葉花音がすぐに答えないから、俺は山口に言った。

「山口知らないのか？　こいつの……」

誕生日は明日……そう言いかけた時、奈良がトイレから戻ってきた。

「ん？　何の話？」

そう言った奈良に、ぎこちない笑みを見せて千葉花音が言う。

「ううん、なんでもないよ」

「そう？」

奈良は首をかしげる。俺は、あえてその話題を続けようとは思わず、また窓の外を眺めた。

その後、昼食を取りながら俺を除いた三人が楽しそうに会話を続け一時間ほどしてから店を出る。店の前で山口と千葉花音と分かれ、奈良とも駅まで一緒に行ってホームで分かれた。

※

次の日、十二月二十四日。終業式が終わると、部室へ向かう。明日から三日間、サッカー部の集中合宿があり、そのミーティングのためだ。

ミーティングが終わって帰り支度をしていると、部長に呼ばれる。
「おい、香川。マネージャーと一緒に買出し行って来てくれるか？」
そう言われて、しぶしぶ、奈良とプランタンに向かった。今日は早く帰って、家でゲームするつもりだったが、部長に頼まれては断れない。高校から一番近くて大きなスポーツ用品店はプランタンの中にある。どうせなら、昨日来た時に、買出しもついでにすればよかったのにと胸の中で愚痴るが、仕方ないか。
プランタンの一番奥にあるスポーツショップに向かおうとメインゲートから入って歩いてると、ベンチに座っている千葉花音に気づく。
誕生日にこんなところにいるってことは、今度こそデートか……急に胸がざわざわしだし、気が付いたら声をかけていた。
「……千葉花音？」
俺の言葉に、千葉花音は眉間にしわを寄せた顔で振り返った。振り返った彼女に奈良も気が付き、声をかける。
「花音ちゃん？　また会ったね。今日は一人？」
千葉花音は、奈良を見ると少し表情を緩めて言う。
「えっと、山口君とか友達を待ってて」
その言葉に、ピクっと耳が反応する。また、山口と一緒なのか？俺はイライラして、ギロッと千葉花音を見た。
「あんた、こんなとこでなにやってるの？」

誕生日も山口と過ごすのか？
そう言った俺に対して、千葉花音は立ちあがって足元を見て言った。
「だから、山口君や友達とクリスマスパーティするから待ってるの！」
「はっ？　クリスマス？　だって、今日はあんたの……」
誕生日だろ？　なんで、誕生日祝いじゃなくて、クリスマスなわけ？
そう聞こうとした時、タイミング悪く山口とクラスメイトが数人やってきた。
「花音ちゃん、お待たせ！」
「あっ、山口君」
千葉花音は山口を見るなり駆けよって、安心したように笑いかけた。
俺には見せないその表情に一段とイライラし、胸が締め付けられるように痛んで彼女から目がそらせなかった。
そんなに、山口がいいのかよ……
俺の視線に気づいて千葉花音が山口に隠れるようにする。俺は苛立つ気持ちを抑えて、山口を呼んだ。
「山口、ちょっと」
「なに？」

「これから本当にクリスマスパーティーするのか？　なんで今日なんだ？　他の目的があるとか……」
　俺がそう聞くと、山口は首をかしげて。
「いや、クリスマスパーティっていうか、ただカラオケするだけだけど？　宮城が言いだして誘われたんだ」
「……そっか。じゃな。奈良、買出し行くぞ」
　前半は独り言のように呟いて、奈良と一緒にスポーツショップに向かった。

　千葉花音にだけはわざと“クリスマスパーティー”って言って、本当は誕生祝いするのかと思ったが、そうではなく山口は本当に今日が誕生日と知らないみたいだった。
　そういえば昨日、誕生日の話題になった時、千葉花音は困った顔をしてあせって話題を変えようとしてた。もしかしなくても、千葉花音は今日が誕生日だって友達の宮城さんにも山口にも言っていないのか？　秘密にしてる——？
　そこまで考えて、疑問に思う。普通、誕生日って、祝ってほしいものだよな……？
　スポーツショップで、買出しリストを見ながら商品を選んでいる奈良から少し離れたところで籠を持って立っていた俺は、シップやスポーツドリンクを持って戻ってきた奈良に聞く。
「なあ、誕生日って祝ってほしいもんだよな？」

突然の質問に驚く奈良だが、こくんと頷く。
「じゃあさ、誕生日を友達に秘密にしておくってなんでだと思う？」
奈良は少し考えてから。
「誕生日が嫌いだからかな？　その日に嫌なことがあったとか？」
誕生日に嫌なこと？　クリスマスイブが誕生日だったら華やかで楽しいだろうに、なんで祝わないんだ？　俺は祝ってやりたい……
そう考えて、胸がどくんっと跳ねる。
ははっ。
俺、いまだに千葉花音の事好きなんだな。今更、自分の気持ちに気づいて笑えてくる。
そんな俺を見て、奈良が少し寂しそうな顔で苦笑する。
「私だったら、好きな人にお祝いされたらうれしいなぁ……理桜に、お祝いされて嬉しかったな……」
その言葉に、奈良が俺の事を本気で好きだったんだと気づく。でも、俺は……
「悪い。奈良の気持ちは嬉しけど、俺は――！」
そう言いかけたとこで、奈良が俺の口にひとさし指をたててあてる。
「花音ちゃんが好きなんでしょ。見てたら分かるよ、好きな人の事だもん」

奈良はそう言って、はっとする。
「もしかして、花音ちゃんの誕生日って今日？　それならお祝いしてあげないと！」
にこっと笑って言う奈良。
「いや、でも、あいつは友達にも秘密にしてるみたいだし……」
「それなら尚更、お祝いしてあげないと！　お祝いしてあげられるのは、誕生日の事知ってる理桜だけじゃない？」
首をかしげて言ってから、パンパンっと大きな音を立てて、奈良が手を叩く。
「はいはい、買出しは以上で終了でーす。理桜は自分が行きたい所へ行ってくださーい！」
「でも、一人じゃ荷物重いだろ？」
しぶる俺の背中を押して。
「これくらい大丈夫だって。行って！　ねっ？」
奈良が言って、にこっと笑った。その笑顔に、俺は笑い返す。
「ありがと、奈良」
俺は駆けだした。
俺の行きたい所――千葉花音のところへ。

そして、彼女の誕生日を祝ってやりたい。そうして、もし、彼女の笑顔を見れたなら、俺は――

【後半戦　3】　ほしかったもの

無我夢中で走って、カラオケ屋に駆けこんだ。
結構な人数がいたから、何部屋かに分れてるか、それともパーティルームか……俺はまずパーティルームに向かおうとして、入り口の横にあるドリンクバーに石川がいるのに気がついて声をかける。
「石川！　お前、山口達と一緒だったよな？　部屋どこ？」
俺は少し息を切らせて、はぁはぁ言いながら聞いた。
「おう、香川も来たのか？　部屋はすぐそこの一〇三だよ」
石川の言葉が言い終わらないうちに駆けだし、一〇三号室のドアを開けた。ドアを開けると、すぐ側に千葉花音が座っていて、隣に座った山口に笑いかけていた。
俺は知らず、眉間にしわが寄る。ドアを開けたまま立ってると、千葉花音がこちらに気づき振り向いた。
「なんで……？」
「おまえこそ、なにやってんだよ？」
俺は、いらついた声で聞く。
「クリスマスパーティー……」

千葉花音は、ビックリしてこっちを見上げたままぽそっと答える。

「はっ？　なんで、自分の誕生日祝わないで、クリスマスなんて祝ってんだよ！？」

その言葉に、千葉花音がびくっと体を震わせる。

「えっ、花音、今日誕生日だったの！？」

近くに座ってた宮城さんが驚いた声をあげる。

やっぱり、秘密にしてたんだな。なんで秘密になんかしてるんだよ。言って、祝ってもらえばいいのに。

ため息をつき、千葉花音を見る。

「なっ、なに？」

そう言って縮こまる千葉花音に近づき、腕をぐいっと掴んでカラオケルームの外に連れ出した。

カラオケ屋を出てもひたすら歩き続ける。勢いで引っ張ってきてしまったが、祝ってやるなんて、素直に言えるかよ……

「まっ、待って！」

その声に振り返ると、千葉花音が転びそうになりながら必死に走っていた。なんで走ってるんだ？　そう思って、歩幅の違いに気づいて立ち止まる。急に立ち止まったからか、俺の背中にドンっと千葉花音がぶつかった。

「どうして……」

そう千葉花音が呟いたのが聞こえて、俺は振り向いた。

「はっ？」

なにが、どうしてなんだ？　俺が疑問に思ってると、千葉花音がすごい剣幕で言い返してきた。

「はいっ？　「はっ？」ってなに？　なんで、こんなとこに引っ張って来たのよ！」

そう言うと同時に、くしゅっとくしゃみをした千葉花音。彼女を見ると、制服の上にコートもセーターも着てなくて、ぶるぶると体を震わせていた。俺が勢いで引っ張り出したからコートも着てなくて、千葉花音の寒そうな格好に気づく。

「悪い……」

そう言って、自分が着ていたコートを脱いで千葉花音の肩にかけてやった。それから、そっと彼女の手のひらを握り、プランタンの屋内に向かって歩き出した。

※

初めて触る千葉花音の手は、柔らかく、暖かかった。プランタンの中に入って暖かくなっても、千葉花音に触れたそこだけが異常に熱く感じられた。

しばらく歩いてると、千葉花音が話しかけてきた。

「ねえ、どうして来たの？」

そう聞かれて、俺は少し冷静になろうと深呼吸した。せっかく来たのに、またさっきのような言いあいになってはだめだと思った。

「ねえ！」

そう思ったのに、千葉花音に大きな声で言われて、俺は勢いよく振り返って言っていた。

「お前、バカ？　なんで自分の誕生日祝わないでクリスマスなんて祝ってんだよ？　どうして他のヤツに誕生日だって言わないんだよ？」

「なっ、ばかって何よ！？　……どうして、私の誕生日知ってるの！？」

「あっ？　そんなの中学の時に言ってただろ……」

俺は言って、千葉花音から目をそらして頭を掻いた。
そんなの、好きな子の誕生日くらい覚えてて当たり前だろ……
そう考えて今度こそ怒鳴らず「祝ってやる」って言おうと思い、千葉花音を見ると眉間のしわを深くして俺を見上げていた。その顔を見て、無意識にいらっとする。

「おまえ、その顔やめろよな。不細工がもっと不細工になるだろ、だから彼氏もできないんだろ？」

どうしてだろう。彼女のこの顔をみるといらいらして、思ってもないことを言ってしまう……ばかは俺の方だな、と自分にあきれる。

「はっ？　何それ？　今関係ないし。ってか、そーゆうあんたこそ、奈良さんはどうしたのよ？　彼女、ほうっといていい訳!?」

その言葉にまたいらいらする。

彼女じゃねーし。なんで、千葉花音まで奈良を彼女と勘違いしてんだよ。

イラついた感情のまま言う。

「はっ？　なに他の女の話持ち出してるんだよっ」

「他の女って、彼女でしょ？」

「おまえにカンケーねえし……」

いや、ここはちゃんと、奈良は彼女じゃないって説明するべきか？でも、だからなに？　って言われたら、困るし……

「あー、そうですか！　私だって、別に興味ないし！　じゃ、あ、ね！」

そんなことの言い合いになって、千葉花音はぷいっと向きを変えて歩き出そうとした。

待って！

俺は、そう思って千葉花音の腕を掴んで引き止める。

「なに？」

千葉花音はうんざりした顔で俺を見た。
俺はいいかげん、ちゃんと自分の気持ちを素直に言わないといけないと思った。でも上手く言葉がでてこなくて……ただ、彼女が行ってしまうことを避けようと腕を握った手に力を入れる。
「イタッ。もう、なんなの！」
顔をしかめて言った花音が俺を見上げて目があった。俺は勇気を振り絞って言った。
「祝ってやるよ、誕生日」
「えっ？」
千葉花音が聞き返す。
「だから！　俺が、花音の誕生日祝ってやるよ！」
言った！
俺はぎゅっと拳を握る。
花音は顔がどんどん赤くなって、口をわなわなと震わしながら言った。
「なっ、何言ってるの？　意味分かんないし。ってか、あんたに祝ってほしいなんて言ってないじゃん！」
そう言った花音にかちんときて、でもその顔が可愛くて。
「はっ？　ほんとにかわいくないな、おまえ」

花音の腕を強く引いて、胸の中に抱きしめていた。

「花音……」

胸の中に彼女の存在を感じて、胸がきゅっと締め付けられて……もう自分の気持ちを言わずにはいられなかった。

「俺は花音が好きだ、つきあってくれ――」

そう言った時。

「花音！　いた！！」

花音の友達の長野さんが俺達のところにやってきた。

「悠ちゃん！」

そう言って花音は俺の胸の中から離れて、がばっと長野さんに抱きついた。

「困るんだよね、勝手に花音連れ出されちゃー。で、要件は済んだの？」

長野さんが、鋭い眼差しで俺を見て言った。

「それは……」

俺は口ごもるしかなかった。やっと自分の気持ちを伝えられたのに邪魔されるようなタイミングで現れた長野さんに苛立つ。そんな

俺に、長野さんが意味深な笑みで近づき。

『邪魔したか？』

耳元でそう図星を指されて、かっと頭に血が上る。俺が花音を好きだと言う気持ち、長野さんに気づかれてる……

「あっ、そうそう。これから花音の誕生日祝いするから、香川君も来たいなら来てもいいけど？　誕生日のこと教えてくれた礼に来てもいいよ」

そう言って、くすっと長野さんが笑った。

※

プランタンの噴水広場。

「花音ちゃん、お誕生日おめでとう！！」

「メリークリスマス！　カンパーイ！」

そう口ぐちに言って、手に持ったペットボトルを上げて近くの人のペットボトルと当てる。

長野さんの来たいなら来てもいいという言葉に従うのは気が進まなかったが、まだ花音とちゃんと話したいことがあったから、仕方なくついて行った。明日からは合宿がある。今日中にちゃんと花音の気持ちを聞いておきたかった。

噴水広場に着くと、山口達と合流する。

「さっきはびっくりしたよ。誕生日だーとか言って、香川が急に花音ちゃん引っ張っていっちゃって。鞄もコートも置いて連れて行っちゃうから、宮城達が必死に花音ちゃん探しに行くしさ」

「悪かった……」

俺は素直に謝った。確かに、急に連れ出して、宮城さんと長野さんに心配をかけさせてしまったのは悪かったと思っている。ちらっと横を見ると、宮城さんに抱きついてる花音が見えて、くすっと笑った。

※

「おい、香川君、彼女はどうしたんだ？」

山口と話してる時、長野さんに急に呼ばれて振り返ると、にやにやした長野さんとおろおろした花音がこっちを見ていた。彼女って言ったよな……俺はいらっとしながら2人に近づいて、あえて花音に話しかけた。

「なに？」

話しかけられてビックリして目を見開いてる花音の横で、長野さんはくすくすと笑って成り行きを楽しんでるようだ。俺はそんな長野さんには話しかけたくなくて、もう一度花音に聞いた。

「花音、なに？」

俺にそう言われて、花音はおどおどと長野さんをつついた。

「えっ？　ああ。香川君、彼女はどうしたの？　って花音が聞いてるよ」

俺はそう言った長野さんをちらっと見て、花音に視線を戻す。長野さんがわざわざ花音に話しを振るのは、俺と花音に話させようという意図があるからだと思った。その真意に一人気づいていない花音。

「えっ、私？　悠ちゃん！？」

そう言って花音は、長野さんと俺の顔を交互に見比べて、びくっと体を震わせてから口を開いた。

「えっと、奈良さんはどうしたの？　先に帰ったの？」

俺はその言葉に、ギロッと花音を睨む。

「奈良とはわかれた、ってさっき言っただろ」

完全に彼女と勘違いしている花音に、奈良は彼女じゃないと言って説明するのが面倒で、てっとり早く彼女じゃないと伝えるために、あえて「わかれた」と言う。

「そっか……」

そう言って一人納得したように頷いてる花音。

無言で手を振りながら去っていく長野さんを横目に俺は言った。

「でっ？」

「えっ？」

そんな俺に対して、花音はぽかんと首をかしげて、長野さんがいないことに気づいてキョロキョロと辺りを見回す。

俺は話の先を促すように言う。

「さっき俺が言ったことの……返事だよ」

「えっと、何のこと？」

かわいく首をかしげて見上げる花音に、いらっとする。まさか、さっきの俺の告白……聞いてなかったのか！？　そう言おうとした時。

噴水広場のイルミネーションがキラキラと順番に光り出し、最後にクリスマスツリーの飾りも光り、てっぺんに付いたオレンジ色の星が輝いた。

花音がイルミネーションにみとれ呟いた。

「わぁ……きれい……」

俺はそんな花音にみとれ、それからクリスマスツリーに視線をそらして……そっと隣に並んだ花音の手を握った。

握った瞬間、びくっと花音の手が震える。それから花音が俺を振り仰いでるのが気配で感じられたが、どんな顔をして俺を見ているのか、怖くて振り向けなかった。

きっと数分の間だった思うけど、すごく長く感じた時間の後。俺が掴んだ手を花音が握り返し、ぼそっと呟いた。

「好き……」

俺はその言葉が信じられなくて、がばっと花音を振り返った。
花音を見た俺の顔はどんなだったのか——
俺を見るなり花音が、くすっと笑ったのだ！
いままで、一度も、俺に向けられることのなかった笑顔が、俺に向けられたのだ。俺は一度地面に視線を落として、恐る恐る花音の顔を見た。

くすっ。

やっぱり花音は笑ってて、それから、ぱっと俺が掴んだ手を離すと長野さん達がいるところへ駆けていった。

【後半戦　3】　ほしかったもの（後書き）

香川のほしかった「笑顔」がやっと手に入りました。

【延長戦】　好き？　嫌い？　1歩の距離で・・・

俺はしばらく呆然とその場に立ちつくした。
さっきまで熱を感じていた手のひらを胸の高さまで持ち上げてまじまじと見つめる。花音が何か言う直前に握り返した気がしたのは、気のせいじゃなかったよな？
いまいち、自分の耳に自信が持てず、自分の手と、離れたところで友達と楽しそうに話してる花音を見比べる。
そこに山口がやってきて肩にぽんっと手を置かれて、びっくりする。

「花音ちゃん、なんだって？　」

「ああ、好きって……言ってた気がするんだが……」

俺はなんとも情けない声で、山口に聞いた。

「なんだったんだ？」

そこだけ話しても分かるはずがないのに、山口が苦笑して言う。

「ふーん。やっぱり、花音ちゃんは香川の事が好きなんだね」

その言葉に呆然と目を見開いて、山口を見る。

「あれ？　気づいてなかった？」

そう聞かれて、頷く。

「そっか……花音は俺の事、好きなのか……？」

まだ実感が湧かなくて、なんだか納得できない。

「で？　香川はどうするの？　奈良さんって彼女がいるんだから、やっぱ断るの？」

複雑な表情の山口に聞かれて、ため息をつく。

「奈良は彼女じゃない、ただの部員とマネージャーだよ……」

「えー、なんだよそれ。もててるのにいままで彼女作んなくて、やっと彼女作ったんだと思ってたんだけど。俺が聞いた時、否定しないしさ？」

山口が苦笑し、俺もつられて苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、断んないよな？　花音ちゃんの事？　それとも、他に好きなやついるのか？　香川のそーいう話、いままでほとんど聞いたことなかったけど」

そう言われて、俺はぼそっと答える。

「いるよ、好きなやつ。ずっと五年間片思いしてる……」

「えっ、五年!?　中一から？　……えっ、それってひょっとして花音ちゃん？」

俺は笑うしかなかった。

そう言って散り散りに帰って行く中、俺は宮城さんと長野さんと一緒にいる花音の所に行った。

※

「じゃーねー」

「ちょっと、いい？」

そう言う俺に、仰ぎ見る宮城さんと花音、にやにやと訳知り顔でにやつく長野さん。俺は、花音をじぃーっと見た。花音は、宮城さんと長野さんを交互に見ると、私？　っと指で自分を指して首をかしげる。

「はいはい。いってらっしゃーい」

そう言って花音の背中を押す長野さんと手を振る宮城さんを後に、俺は歩きはじめた。その後ろを、花音がちょこちょこと小走りについてくる。しばらく歩いたところで、俺は振り返って、花音に聞いた。

「なあ、さっきなんて言ったの？」

その言葉に、ぱっと顔をあげた花音と目があって、その澄んだ瞳を見つめる。花音は、みる間に顔が赤くなって、視線を手元にそらした。

「えっと……」

口ごもる花音。

「“好き”って言ったよな？」

俺は一言一言確かめるように静かな声で言って、俯く花音の顔を覗き込んだ。久しぶりに間近で見る花音は、もうあの眉間にしわを寄せた顔ではなくて、まっすぐな瞳で俺を見ていた。

俺は初めて見る真剣な表情に、口元がほころんだ。

すると、花音が一瞬びっくりした顔になり。

「言ったよ……」

花音が苦笑して言った。

この五年間、決して自分に向けられることのなかった笑顔を……ずっとほしいと思っていた花音の笑顔を、やっと手に入れることができたんだ、と実感する。

俺は満面の笑みを浮かべて、花音にがばっと抱きついた。

「好きだ。俺も花音のことが好きだ！」

そう言った俺の腹を、ぐいぐいっと花音が両手で押して俺の抱擁から抜け出して、ぎゅっと眉間のしわを寄せて言った。

「うそっ、香川は私のこと嫌いなんじゃ……」

その言葉に、こめかみが引きつる……

さっきまでの笑顔が一転、また眉間にしわを寄せた顔を向けられ、イライラとした感情が胸を占める。

俺は思わずすごい剣幕で聞き返していた。

「はっ？　なんで、そうなるんだよ！」

っと言ったが……

過去の自分を振り返ると……、そう思われても仕方がないことを自分がしていたと自覚し、二の句が継げなかった。

花音は、頬を膨らませ不服そうな顔で俺を見上げてる。

「えっと、その……中学の時は、いろいろ意地悪して悪かった。本当はずっと、仲良くしたいって思ってたのに、そうできなくて……」

そう言って頭を掻いて、視線を落とす。そんな俺に。

「私だって、ずっと香川の事が大嫌いだったんだから！」

花音が放った言葉に、不覚にも胸が痛む。恐る恐る花音の顔を見ると、怒った顔から。

にこっ。

予想外の満面の笑みで。

「でも……大嫌いだったけど、好きだったみたい」

照れた顔で花音が言った。

俺は目を見張り、それから真剣な瞳を向けて花音に言った。

「俺だって、ずっと花音の事が好きだったよ——俺と付き合ってください」

そう言った俺に、花音がこくんと頷いて、ゆっくりと一歩俺に近づき、そっと腕を俺の背中にまわして抱きついてきた。

ドキンっ。

鼓動が早鐘を打ちはじめる。

俺をかわいいと言わなかった初めての子。

彼女をみるとイラついた。

どうしてそんな気持ちになるのか全然わからなかったが、彼女の顔を見てイライラと胸がざわついた瞬間、俺はすでに恋に落ちていたのかもしれない。

好きと嫌いの間の距離で、俺は一人、もがいていたのかもしれない。

どうしてこんなに、恋は難しいんだろうか……

【延長戦】　好き？　嫌い？　1歩の距離で・・・（後書き）

あと1話、おまけの話が続きます。

【ロスタイム】　はしる星の歌

クリスマス・イブ。プランタンからの帰り道。
手のひらに感じる熱を確かめるように、小さな手をぎゅっと握る。
花音が俺を見上げて、くすっと笑った。
俺はかぁーっと顔が赤くなるのが自分でも分かって、花音から視線をそらして駅までの道のりを歩いた。

「あっ！」

空を見上げて、花音が声をあげた。

「流れ星！」

その声に、俺も空を見上げる。
チリチリっと、聞こえない音を立てて、星が夜空を駆けて行った。
「ねね、知ってる？　迷いの森の聖なる木に――」
嬉しそうに話す花音が可愛くて、くすっと笑う。
「オレンジ色の星を飾ると願いが叶うんだろ？」
そう言った俺を見上げて、花音が眉間にしわを寄せる。
「なんだ、知ってるのか……」

「小さい時にそんな内容の本を読んだ記憶がある」

「香川も読んだの？」

そう言った花音をじぃーっと見つめる。俺の視線に気づいて、花音が首をかしげた。

「なんで呼び捨て？　せめて呼び捨てなら、下の名前で呼べよ……」

俺が、ちょっと不満げに言うと。

「やだよ！　だって、ずっと香川って呼んでたのに」

「待て！　一度も香川って呼ばれた記憶ないんですけど？」

「心の中でだよ！　そーいう香川だって、私の名前一度も呼んだことなかったくせいに、いきなり花音って呼び捨てにしてるじゃない！」

「なんだよ？　ダメなのかよ？」

少しふてくされて言うと、花音がぱっと俺から視線をそらした。

「いきなり名前で呼ぶのは無理……、恥ずかしいもん」

見ると、耳まで赤くなってて、その姿が可愛くて頬が緩んだ。

「あっ、また流れ星！」

ぱっと顔をあげて、花音が叫んだ。

「なんだ？　今日はたくさん星がはしるな……」

「香川は、何かお願いしないの？」

そう言って見上げた花音の顔をまじまじと見つめる。

俺の願いは、もう叶ったからな――

「ねえ？」

手を引っ張って訪ねてくる花音に聞き返す。

「花音こそ、願い事ないの？」

「えっ、私？　うーん、私は。これから、いっぱいいっぱい大好きなものが増えていったらいいな」

そう言って笑顔で俺の顔を見る。俺も笑い返して、改札に向かう階段を登り始めた。

【ロスタイム】　はしる星の歌（後書き）

これにて、完結です！
ここまで読んでくださってありがとうございます。
１ポイントでもいいので評価頂けると今後の励みになります。
初めて男性視線で書いたので、上手く表現できているか心配です。
続編を書く予定なのでそちらもよかったら読んでみて下さい。
誤字などありましたら、お知らせください＞ｍ（＿＿）ｍ＜
誤字訂正、本文も少し訂正しました。（２０１１．２．２６）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6070p/

ハシリボシ

2011年8月7日20時24分発行